習得した知識を活用する子どもが育つ社会科学習

名古屋市立白水小学校教諭　　村　　瀬　　浩　　平

Ⅰ　研究のねらい

私が考える「習得した知識を活用する」とは、複数の具体的な知識を関連付けた概念的知識を習得し、そこから見いだされる仕組みや人々の思いを捉え、新しい文脈や異なる場面について考えることである。

現代社会は、課題が多様化しており、従来の考え方や方法では解決できないことが増えている。「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」では、「答えのない問いにどう立ち向かうのか」が問われており、最適解や納得解を生み出す力が重要視されている。そのため、答えのない問いに向き合うためには、事実としての知識を単に習得するだけでなく、複数の具体的な知識を関連付け、そこで見いだされた仕組みや人々の思いを抽象化して捉え、新しい文脈でも活用できるような汎用性のある知識へと高める必要がある。学習指導要領でも「社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識を獲得するように学習を設計すること」が求められており、習得した知識を活用する学習の意義はますます高まっている。

京都大学大学院准教授の石井英真氏は、答えのない問いに対して最適解や納得解を創り出すために、学びの質的レベルを「知る」「分かる」「使える」の三層で捉えるべきであると述べている。そして、学習を深めるためには具体と抽象を往還しながら理解を形成させることが不可欠であると述べ、個別の知識の習得状況を問う「知る」課題、概念の意味理解を問う「分かる」課題、知識・技能の総合的な活用力を問う「使える」課題を設定することが重要であると指摘している。しかし、私のこれまでの授業実践を振り返ると、学習問題に迫るための問いの設定が十分ではなく、「知る」「分かる」活動の往還が構成されていなかった。その結果、複数の具体的な知識の関連付けができないことから抽象的に捉えることが難しく、概念的知識の習得に至らない子どもが多かった。また、知識を活用する場面では、具体的な知識を並べるだけにとどまり、実生活に即した課題解決へとつなげることができていなかった。石井氏は、小学校中学年段階では、パフォーマンス課題の設定に必ずしもこだわる必要はないとしつつも、本質的な理解を促す問いを設定することが重要であると述べている。そこで、単元末に「これから大切なこと」について考えることのできる「使えるための問い」を設定することにした。

本研究では、「知るための問い」「分かるための問い」「使えるための問い」を設定し、これらの問いを手掛かりとして学習の流れを構成し、石井氏の提唱する三層の学力観に基づいて研究を進めていく。

Ⅱ　研究の方法

１　研究の対象　　名古屋市立白水小学校　第４学年　21人

２　基本的な考え

主題に迫るために、社会的事象について調べる「知る」活動と、その原因や背景を考える「分かる」活動を往還しながら進める。また、類似する社会的事象と比較することで、複数の事象に通じる共通の仕組みや人々の思いなどを見いだし、それを生かして考える場面として、「使えるための問い」を設定する。そこで、「つかむ」「知る・分かる」「使える」という三つの段階を設け、学習を進めることにした【資料１】。

学習段階	主な学習活動
つかむ	○　身の周りで行われている取組や人々の働きについて気付いたことや疑問点を出す活動を通して、学習問題を設定する。
知る 分かる	○　学習問題について、調べたり考えたりする活動を行う。 ○　調べたことや考えたことを整理する。 ○　学習問題について自分の考えをまとめる。
使える	○　類似事象について、調べたり考えたりする活動を行う。 ○　類似事象と比べて、共通する仕組み人々の思いをキーワードで捉える。 ○　「使えるための問い」について考えをまとめる。

【資料１　基本的な学習の流れ】

(1) 「つかむ」段階

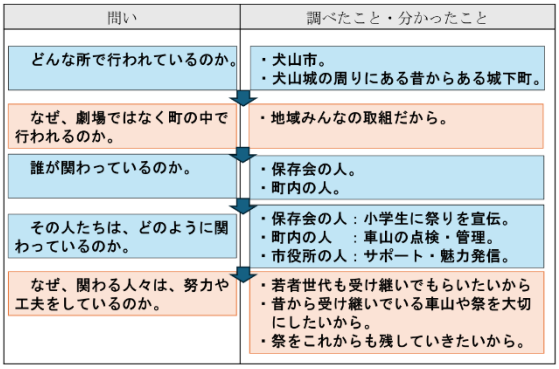
社会的事象に関する資料を提示し、子どもにとって身近な問題や取組についての気付きや疑問点を出し合う。子どもから出た気付きや疑問点を基に、学習問題を設定する。

(2) 「知る・分かる」段階

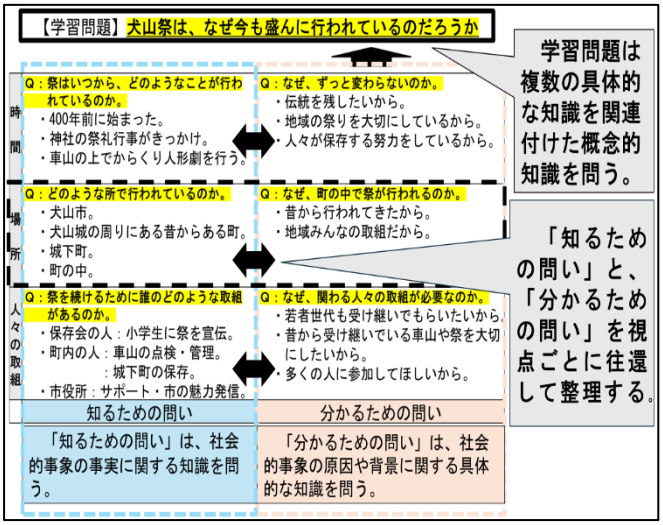
「知る・分かる」段階では、「知る」活動と「分かる」活動を往還しながら学習活動を進めることで、事実に関する知識を得たり、その原因や背景等を考えて説明したりして複数の具体的な知識を関連付けた概念的知識を習得できるようにする。

まず、社会的事象に対する疑問や学習問題に対して明らかにしたいことを出し合う。そして、自ら解決したい問いを選択し、調べたことや分かったことを「追Ｑマップ」に記述する【資料２】。次に、「時間」や「場所」、「人々の取組」の三つの視点ごとに「知るための問い」と「分かるための問い」を設定した「追Ｑシート」に「追Ｑマップ」で調べたことを整理する【資料３】。そして、「追Ｑシート」を共有し、互いの「知るための問い」や「分かるための問い」への考えを説明したり、補ったりすることで視点ごとの理解を深める。最後に、学習問題に対する自分の考えをまとめる。

このように、「追Ｑシート」を活用し、三つの視点ごとに「知る」活動と「分かる」活動を往還しながら調べた内容を整理することで、複数の視点から具体的な知識を関連付けて理解を深め、概念的知識を習得することができると考えた。



【資料２　「追Ｑマップ」】

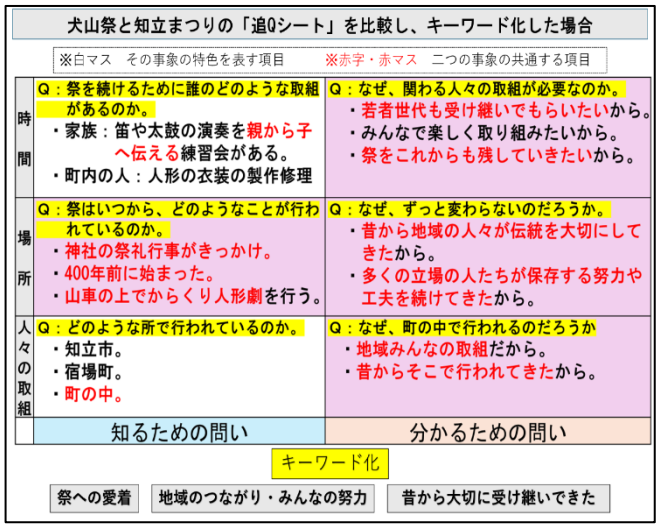


【資料３　「追Ｑシート」】

(3) 「使える」段階

「使える」段階では、「知る・分かる」段階で取り上げた社会的事象と類似する社会的事象を取り上げ、比較する活動を行う。これにより、複数の事象に共通する仕組みや人々の思いを捉え、「使えるための問い」に対して知識を活用して考えることができるようにする。まず、類似する社会的事象を「追Ｑシート」を用いて調べる。「追Ｑシート」の構成を前段階とそろえることで、二つの社会的事象について整理した内容を比較しやすくする。次に、二つの「追Ｑシート」を比較し、共通点を色分けして整理することで、共通する仕組みや人々の思いを捉えやすくする。そして、その仕組みや人々の思いをキーワード化する【資料４】。最後に、キーワードを基に「使えるための問い」に対して、考えをまとめる。

このように類似する社会的事象を比較することで、共通する仕組みや人々の思いをキーワードで捉え、知識を活用することができると考えた。



【資料４　共通する仕組みや人々の思いのキーワード化】

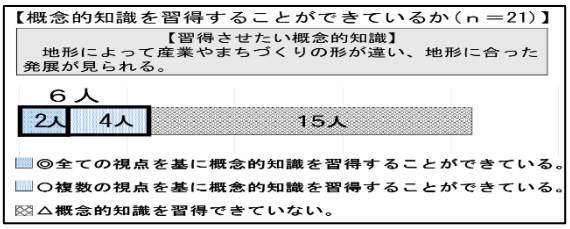
Ⅲ　子どもの実態

1　**調査日**　　５月７日～５月23日

2　**調査方法**　　プレ実践における記述分析

3　**調査対象**　　名古屋市立白水小学校　第４学年21人

4　**記述調査の結果と考察**



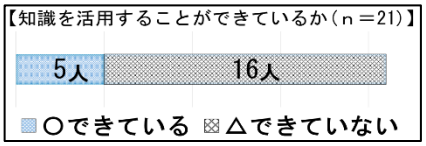
【資料５　学習問題のまとめの記述分析】

(1) **概念的知識を習得することができているか（調査１）**

単元「わたしたちの愛知県」において、学習問題「愛知県の特色について考えよう」に対するまとめについての記述内容を分析した【資料５】。「西は低い平地で、東は土地の高い山地である」「工場が多く、農業や漁業も発展している」「平地や海岸沿いにまちは集まり、まちとまちは結ぶように交通が広がっている」という「地形」「産業」「まちづくり」の各視点における具体的な知識を関連付けて概念的知識を習得することができた子どもが21人中６人いた。一方で、概念的知識を習得することができなかった子どもが21人中15人いた。記述内容を分析すると、「愛知県には工場が多い」と断片的な事実のみの記述が多く、調べた内容を他の具体的な知識と関連付ける活動が十分ではなかったことが原因であると考える。

こうした実態から、視点ごとに「知る」活動と「分かる」活動を往還しながら整理することで、複数の具体的な知識を関連付けて概念的知識を習得することができるようにする必要がある。

(2) **知識を活用することができたか（調査２）**



【資料６　「使えるための問い」の記述分析】

単元「わたしたちの愛知県」において、学んだことを生かして、愛知県の今後の展望について考えさせるために、「愛知県のこれからの発展のために大切なことは何か」という「使えるための問い」を設定した。その記述内容を分析した結果、「西は平地で、工場が多く建てられている」「東は山地で、農業が行われている」等の学んだことを基に「人や物の行き来ができるように、平地と山地を結ぶ交通手段をもっと発展させること」のように、今後の発展に関わる具体的な記述をした子どもが21人中５人いた【資料６】。一方で、知識を活用することができなかった子どもが21人中16人いた。記述内容を分析すると「愛知県には工場が多いから、これからも工場を増やせばよい」と調べた事実の単純な言い換えにとどまった記述が多く、調べた事実を基に他の社会的事象にも通じる共通の仕組みへと抽象的に捉える活動が十分でなかったことが原因であると考える。

こうした実態から、学んだ社会的事象と類似する社会的事象を比較することで、共通する仕組みや人々の思いをキーワードで捉え、知識を活用することができるようにする必要がある。

5　**観察する子どもについて**

実態調査の結果を受けて、本研究で観察する子どもを３人抽出した。実態調査の結果を以下に示す。

	調査１	調査２	子どもの実態
A児	○	△	「西は平地で大きな工場が多い。東は山地で畑が多い。地形に合った産業が発展している」と「地形」と「産業」の具体的な知識を関連付けて概念的知識を習得できている。しかし、「愛知は工場が多いから、これからも工場を増やせばよい」と、仕組みや人々の思いを捉えて知識を活用することができていない。
B児	△	△	「西は低い地形で平野があり、東は高い地形で山地が多い」と、「地形」の具体的な知識による記述にとどまり、他の視点と関連付けた概念的知識を習得できていない。また、「地震に強い愛知県になってほしいので、避難所を建てるのが大切」と仕組みや人々の思いを捉えて知識を活用することができていない。
C児	△	△	各視点で調べることはできたが、関連付けてまとめることができず、概念的知識を習得することができていない。また、「西の土地の低いところを高くすることが大切」と仕組みや人々の思いを捉えて知識を活用することができていない。

Ⅳ　第１次授業研究（６月）

１　単元　　受けつがれてきた犬山祭

２　目標

犬山祭の歴史や祭を支えてきた人々の苦心や努力を調べ、犬山祭には地域の発展や人々の思いが込められていることを理解できるようにする。また、知立まつりと比較し、保護や継承のための仕組みや、祭の継承に尽力した人々の思いに着目し、「祭」に対する自分の考えを適切に表現できるようにする。

３　検証項目

(1)　「知る・分かる」段階において、「追Ｑシート」を活用し、視点ごとに「知る」活動と「分かる」活動を往還しながら調べた内容を整理することは、概念的知識を習得する上で有効か、学習問題に対するまとめの記述からつかむ。

(2)　「使える」段階において、類似した社会的事象を比較することは、共通する仕組みや人々の思いをキーワードで捉え、知識を活用する上で有効か、「使えるための問い」に対する記述からつかむ。

４　実践の概要（14時間完了）

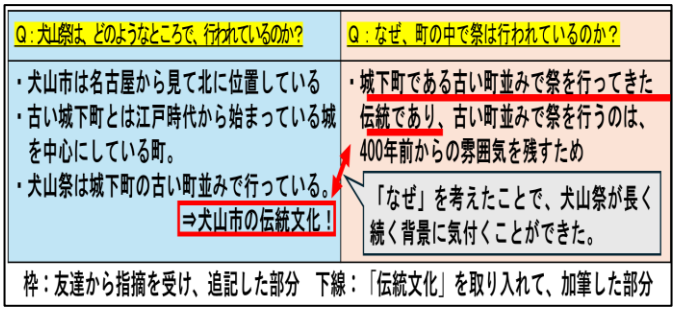
段階	主な学習活動
つかむ	第１時　犬山祭や知立まつりなどの複数の祭の様子が分かる動画資料を基に、愛知県内には古くから残る祭が今も行われていることを捉える。 第２時　犬山祭についての年表資料や、犬山祭の来場者数等の資料を基に、犬山祭について気付いたことや疑問点を出し合い、学習問題を設定する。 【学習問題】犬山祭は、なぜ今も盛んに行われているのだろうか
知る・分かる	第３～５時　学習問題について問いを出し合う。それらの問いを「追Ｑマップ」に調べる。 第６～８時　「追Ｑマップ」を基に、「追Ｑシート」に「時間」や「場所」、「人々の取組」の三つの視点ごとに整理し、犬山祭が保存・継承されている背景について調べたり、考えたりする。 第９時　「追Ｑシート」を基に、「知るための問い」と「分かるための問い」について共有し、学習問題について考えをまとめる。【検証場面①】 【単元における概念的知識】 地域の人が協力して保護・継承のための努力や工夫を続けてきたことにより、犬山祭は受け継がれてきた伝統である
使える	第10～12時　犬山祭と同じユネスコ無形文化遺産である知立まつりを取り上げる。「追Ｑシート」に「時間」や「場所」、「人々の取組」の三つの視点ごとに整理し、知立まつりが保存・継承されている背景について調べたり、考えたりする。 【使えるための問い】 これから『祭』が続いていくために、大切なことは何だろうか 【仕組みや人々の思い】 伝統の保護・継承/人々の協力/祭への愛着 第13～14時　犬山祭と知立まつりの「追Ｑシート」を比べることで、共通する仕組みや人々の思いをキーワードで捉える。そして、キーワードを基に「使えるための問い」に対する考えをまとめる。【検証場面②】

５　第１次授業研究の様子と考察

(1)　検証場面１　（第９時）

まず、「追Ｑシート」をグループで共有し、三つの視点についての「分かるための問い」における具体的な知識を説明し合う活動を行った。その後、学習問題「犬山祭は、なぜ今も盛んに行われているのだろうか」について考えをまとめた。

Ａ児は、前時までに「時間」「場所」「人々の取組」の三つの視点における「知るための問い」「分かるための問い」に対して、「追Ｑシート」に整理できていた。グループで説明する活動では、Ａ児は「分かるための問い(場所)」に対して、「古い町並みで祭を行うのは、400年前の雰囲気を残すため」と説明した。しかし、友達から「400年前の雰囲気を残すためだけど、城下町そのものが伝統文化だからこそ残っているのでは？」と指摘を受けたことで、Ａ児は「城下町の古い町並み」を「犬山市の伝統文化」と捉え、「追Ｑシート」に追記した【資料７】。その結果、Ａ児は、「追Ｑシート」に整理した三つの具体的な知識を関連付け、学習問題のまとめでは「伝統ある城下町の祭を守るために、多くの人が協力し、『続けたい』という思いがあるからこそ今も続いている」と記述し、伝統文化



【資料７　Ａ児の「追Ｑシート」の一部抜粋】

を守り継いでいく取組について理解を深めることができた【資料８】。

また、Ｂ児は「400年前からの伝統を大事にするために多くの人が協力し、盛り上げているから」と「時間」と「人々の取組」の二つの視点を関連付けて説明した。Ｂ児も伝統文化を継承していくことについて捉えることができていた。

一方で、Ｃ児は前時までの「追Ｑシート」では、三つの視点について整理することができていた。グループでの話合いでは、犬山祭のきっかけである「針綱神社の祭礼」であることを中心に共有していた。それを基に、学習問題のまとめでは、「犬山市の人が神社を大切にしているから」と述べ、「時間」の視点に基づく説明にとどまった【資料９】。犬山祭のきっかけである「針綱神社の祭礼」の事実を基に「神社を大切にしているから今も盛んに行われている」と記述したが、他の視点の具体的な知識と関連付けることはできていなかった。

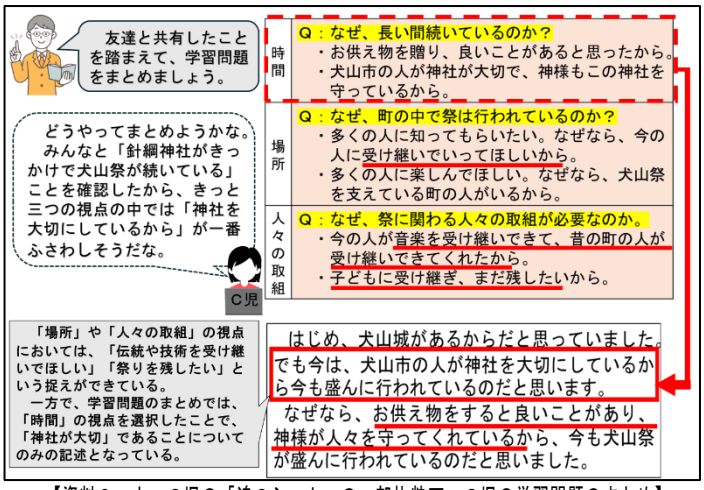
私は最初、車山があるから犬山祭は今も盛んに行われているのだと思っていました。しかし今は、伝統のある城下町で行う犬山祭は、他の地域の祭とは一味違うからこそ、伝統を守るために、多くの人が協力し、「続けたい」という思いがあるからこそ今も続いているのだと思います。

例えば、城下町という伝統ある古い町並みの雰囲気を400年間残してきていることや、保存会や市役所が山車やからくりを修理しているのは、地域の人がその伝統を大切にしているからだと思います。また、400年もの間、親から子へと笛や太鼓の演奏が５～６世代にもわたって教え続けてきたことも理由です。

伝統のある城下町で行う祭りは他の地域の祭とは一味違うからこそ、今も犬山祭は盛んに行われていると思います。

枠：概念的知識としての記述　下線：「時間」「場所」「人々の取組」に関する具体的な知識

【資料８　Ａ児の学習問題のまとめ】



【資料９　上：Ｃ児の「追Ｑシート」の一部抜粋下：Ｃ児の学習問題のまとめ】

(2) 検証場面１の結果と考察

Ａ（十分満足できる）	Ｂ（おおむね満足できる）	Ｃ（努力を要する）
全ての視点における具体的な知識を関連付け、概念的知識を習得できている。	複数の視点における具体的な知識を関連付け、概念的知識を習得できている。	具体的な知識を関連付けることができず、概念的知識を習得することができていない。
11人		10人（Ｃ児）
２人（Ａ児）	９人（Ｂ児）	

Ａ児やＢ児のように、学習問題「なぜ、犬山祭は今も盛んに行われているのだろうか」について、「時間」や「場所」、「人々の取組」の各視点における複数の具体的な知識を関連付けて考えをまとめ、概念的知識を習得することができた子どもは、21人中11人であった。これは、「知るための問い」「分かるための問い」を往還しながら学習を進めることで、視点ごとの具体的な知識を関連付けて捉えることができるようになったためだと考える。

一方で、Ｃ児のように、特定の視点のみを基に記述し、具体的な知識を関連付けることができずに概念的知識を習得することができなかった子どもが21人中10人いた。これは、三つの視点の具体的な知識が互いにどのように関連しているのかを意識してまとめることができなかったことが原因であると考える。

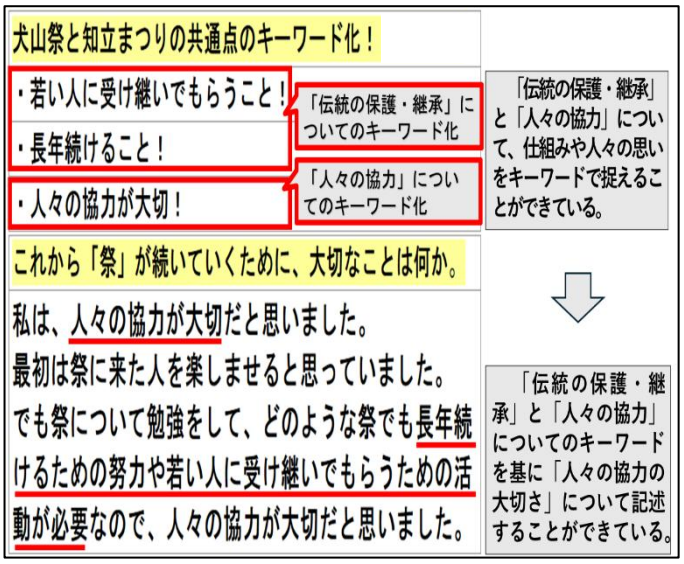
(3) 検証場面２（第13～14時）

まず、前時までに作成した犬山祭と知立まつりの「追Ｑシート」を比較し、共通点を色分けして整理した。次に、犬山祭と知立まつりに共通する仕組みや人々の思いをキーワード化した。そして、どのような言葉でキーワード化したのかを互いに説明し合い、考えを共有した。最後に、キーワードを基に「これから『祭』が続いていくために、大切なことは何だろうか」という「使えるための問い」について考えをまとめた。

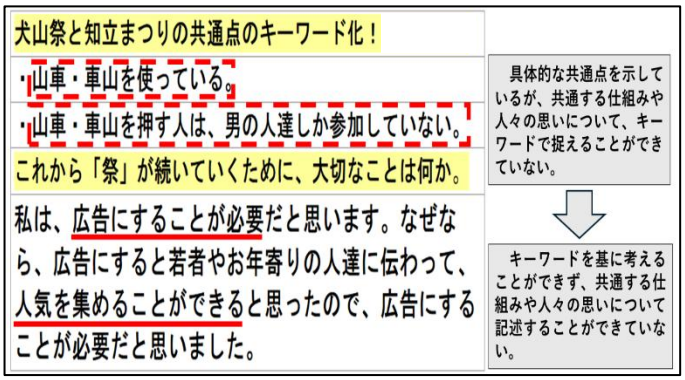
Ｂ児は、犬山祭と知立まつりを比較したことで、「伝統の保護・継承」「人々の協力」という共通する仕組みや人々の思いについてキーワード化した。「伝統の保護・継承」「人々の協力」についてのキーワードを基に、「人々が協力すること」の重要性について記述した【資料10】。

また、Ａ児は「人々の取組が大切」と「人々の協力」についてキーワード化し、「犬山祭や知立まつりは、人々の一生懸命な取組によって、山車(だし)や人形劇などの祭の見せ場が生まれているから祭が続く」と記述し、祭を続けていく上で人々の協力が欠かせないことを考えることができていた。

一方、Ｃ児は、犬山祭と知立まつりを比較し、「山車・車山(やま)を使っていること」という具体的な共通点をまとめたが、共通する仕組みや人々の思いについてキーワード化することはできなかった。説明する活動では、「県内の祭では山車や車山が無い祭もあると思う。これから大切なことは山車や車山という道具かな？」と問い返され、回答に困惑する様子が見られた。さらに、「使えるための問い」に対する記述には、キーワードを基に考えず、知識を活用するまでには至らなかった【資料11】。



【資料 10　Ｂ児の「使えるための問い」に対する記述】



【資料 11　Ｃ児の「使えるための問い」に対する記述】

(4) 検証場面２の結果と考察

<table>
<tr><th>Ａ（十分満足できる）</th><th>Ｂ（おおむね満足できる）</th><th>Ｃ（努力を要する）</th></tr>
<tr><td>共通する仕組みや人々の思いについての複数のキーワードを基に「使えるための問い」に対して知識を活用して記述できている。</td><td>共通する仕組みや人々の思いについてのキーワードを基に「使えるための問い」に対して知識を活用して記述できている。</td><td>共通する仕組みや人々の思いについてのキーワードを基に「使えるための問い」に対して知識を活用して記述できていない。</td></tr>
<tr><td colspan="2">10人</td><td rowspan="2">11人（Ｃ児）</td></tr>
<tr><td>５人（Ｂ児）</td><td>５人（Ａ児）</td></tr>
</table>

Ａ児やＢ児のように、二つの社会的事象を比較したことによって、共通点を「伝統の保護・継承」「祭への愛着」「人々の協力」といった共通する仕組みや人々の思いをキーワードで捉え、「使えるための問い」について知識を活用して記述できた子どもは21人中10人であった。これは、類似事象を比較したことで、共通する仕組みや人々の思いを捉えることができたからだと考える。

一方で、Ｃ児のように、共通する仕組みや人々の思いをキーワードとして捉えられず、「使えるための問い」に対して知識を活用して記述できなかった子どもは、21人中11人いた。これは、「山車・車山がある」や「からくり人形がある」のような事実の共通点に着目しただけで、「伝統ある道具を保存・継承する」「受け継いでいく」等の共通する仕組みや人々の思いを捉えることができず、キーワード化まで至らなかったためだと考える。

Ⅴ　長期研修で学んだこと

１　白百合女子大学教授　中田　正弘　氏

中田氏からは、学習問題をまとめる際に、「具体的な知識の関連付けの仕方」や「学習問題への答え方」という学習方略の理解を深めることの重要性について指導・助言を受けた。具体的な知識の関連付けを促すためには、「調べた視点三つをつなげると何が言えるか」「三つの関係や順番はどうなっているか」等の具体的な発問や知識同士の関係性を捉える活動が重要であると指導・助言を受けた。

第２次授業研究では、学習問題をまとめる前に、「調べて分かった三つの視点はどのような関係なのか」と「時間」や「場所」、「人々の取組」の三つの視点における具体的な知識を関連付ける活動を設けることで、学習問題をまとめる活動の意味を理解できるようにし、具体的な知識の関連付けを図る。

２　山形大学大学院教授　江間　史明　氏

江間氏からは、個別的・具体的な知識を抽象的に捉え、応用・転移可能な知識へと高めていくための支援について指導・助言を受けた。特に、教師が習得させたい概念的な理解を示すキーワードは、子どもが自力で表現することが難しいため、教師が概念となる言葉自体を明示したり、キーワード化する上での条件を明示したりするなどの思考の方向付けが必要であると指導・助言を受けた。

第２次授業研究では、名古屋港の開発と神野新田の開発という類似した社会的事象と「使えるための問い」を基に、「これからの時代でも大切なこと」「地域の発展につながること」という二つの条件を示すことで、具体的な共通する仕組みや人々の思いを抽象的に捉え直し、キーワード化を図る。

３　大阪成蹊大学准教授　丸野　亨　氏

丸野氏からは、概念の転移には近接転移と遠隔転移の二種類があり、知識を活用するためには、授業設計の段階でどちらを促すのかを意識する必要があると指導・助言を受けた。特に、近接転移を促すことができるような「使えるための問い」を繰り返し設定することが、パフォーマンス課題や過去と現在、未来をつなぐ遠隔転移につながるという指導・助言を受けた。

また、広島県府中市教育委員会の松本直丈主幹兼管理係長、関西学院初等部教諭の宗實直樹氏からも研究テーマについて指導・助言を受けた。

Ⅵ　第２次授業研究に向けての改善点

１　検証項目１について

学習問題をまとめる前に、「三つの視点はどのような関係か」と問い掛け、「追Ｑシート」に整理した「時間」「場所」「人々の取組」の具体的な知識を比べたり、つなげたりして関連付ける活動を行う。そうすることで、視点を横断して共通する内容に気付くことができ、概念的知識を習得できるようにする。

２　検証項目２について

キーワード化の活動の前に、「これからの時代でも大切なこと」「地域の発展につながること」というキーワード化の条件を示す。そうすることで、二つの社会的事象に共通する仕組みや人々の思いをキーワードとして捉えることができ、キーワード化を通して「使えるための問い」に対して知識を活用して考えることができるようにする。

Ⅶ　第２次授業研究（10月）

１　単元　　発展してきた名古屋港

２　目標

名古屋港の開発の歴史や先人の苦心や努力を調べ、名古屋港の開発には地域の発展や人々の思いが込められていることを理解できるようにする。また、豊橋港の神野新田の開発と比較し、地域を発展させる仕組みや先人の思いに着目し、「地域の発展」に対する自分の考えを適切に表現できるようにする。

3　検証項目

(1)　「知る・分かる」段階において、「追Ｑシート」を活用し、「知る」活動と「分かる」活動を往還しながら調べた内容を整理する際に、具体的な知識を関連付ける活動を設けることは、概念的知識を習得する上で有効か、学習問題に対するまとめの記述からつかむ。

(2)　「使える」段階において、奥田助七郎の名古屋港の開発と神野金之助による神野新田の開発を取り上げて比較する際に、「これからの時代でも大切なこと」「地域の発展につながること」というキーワード化の条件を示すことは、共通する仕組みや人々の思いをキーワードで捉え、知識を活用する上で有効か、「使えるための問い」に対する記述からつかむ。

4　実践の概要（14時間完了）

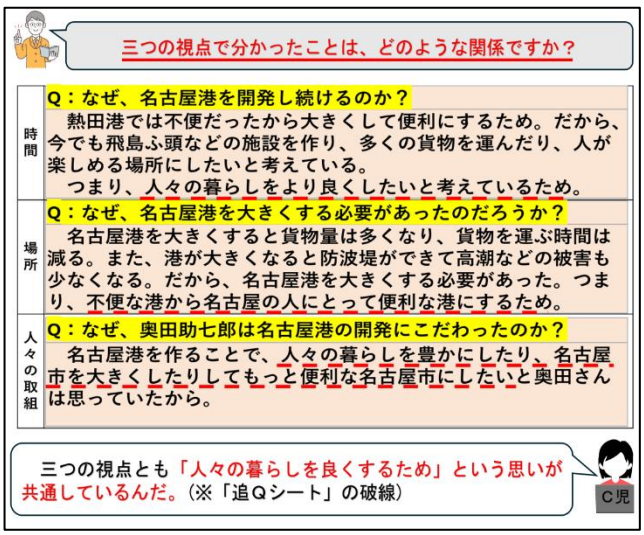
段階	主な学習活動
つかむ	第１時　奥田助七郎や神野金之助等に関わる資料を基に、愛知県内には県の発展に尽くした先人がいることを捉える。 第２時　名古屋港の開港当時と現在の様子の写真資料や、名古屋港の貿易額等の資料を基に、名古屋港の開発や発展について気付いたことや疑問点を出し合い、学習問題を設定する。 【学習問題】名古屋港は、なぜ日本一の港に発展したのだろうか
知る・分かる	第３～５時　学習問題について問いを出し合う。それらの問いを「追Ｑマップ」に調べる。 第６～８時　「追Ｑマップ」を基に、「追Ｑシート」に「時間」や「場所」、「人々の取組」の三つの視点ごとに整理し、名古屋港の開発における時代背景や開発における先人の思いや願い、開発に伴う苦心や努力について調べたり、考えたりする。 第９時　「追Ｑシート」を基に、「知るための問い」と「分かるための問い」について共有する。また、「時間」や「場所」、「人々の取組」の三つの視点を関連付けた後、学習問題について考えをまとめる。【検証場面①】 【単元における概念的知識】 様々な苦心や工夫を重ねて、名古屋港を開発した奥田助七郎たちの働きにより、人々の生活の向上への願いが実現し、名古屋港は発展している
使える	第10～12時　日本でも有数の貿易港である豊橋港に着目させ、豊橋港の基となる神野金之助による神野新田の開発を取り上げる。また、「追Ｑシート」に「時間」や「場所」、「人々の取組」の三つの視点ごとに整理し、神野新田の開発における時代背景や開発における先人の思いや願い、開発に伴う苦心や努力について調べたり、考えたりする。 【使えるための問い】これからの地域の発展のために、大切なことは何だろうか 【仕組みや人々の思い】新技術の活用/人々の協力/地域の発展への願い 第13～14時　名古屋港の開発と神野新田の開発の「追Ｑシート」を比べることで、共通する仕組みや人々の思いをキーワードで捉える。そして、キーワードを基に「使えるための問い」に対する考えをまとめる。【検証場面②】

5　第２次授業研究の様子と考察

(1)　検証場面１（第９時）

まず、「追Ｑシート」をグループで共有し、「時間」や「場所」、「人々の取組」の三つの視点に基づく「分かるための問い」における具体的な知識を説明し合った。次に、「三つの視点で分かったことは、どのような関係か？」と問い掛け、視点を横断して具体的な知識を関連付ける活動を行った。その後に、学習問題「名古屋港は、なぜ日本一の港に発展したのだろうか」について考えをまとめた。

Ｃ児は、具体的な知識を関連付ける活動において、三つの視点に共通している記述に着目したことで、「三つの視点とも人々の暮らしを良くするための取組だ」と共通点に気付くことができた【資料12】。学習問題のまとめでは「奥田さんたちの人々の暮らしを豊かで便利にするための努力や、その思いや願いを受け継いできたから、名古屋港が日本一の港になった」と記述し、苦心や工夫を重ねた先人の働きが地域の発展につながったことを「時間」や「場所」、「人々の取組」の視点を横断して具体的な知識を関連付けて捉えることができた【資料13】。



【資料 12　具体的な知識を関連付ける様子とＣ児の「追Ｑシート」の一部】

奥田さんたちの人々の暮らしを豊かで便利にするための努力や、その思いや願いを受け継いできたから、名古屋港が日本一の港になった。

奥田さんは、市民に反対されながらも、吉田さんや時任さんたちと一緒に未来の名古屋港の開発に希望をもっていた。当時は、大きな名古屋港を開発することで貨物の量が増え、貨物を運ぶ時間が減らすことができた。また、遠浅の海という悪い条件を奥田さんたちが乗り越え、ふ頭を増やしたり、今ではいろいろな人々のことを考えて楽しめる施設を作ったりしたことで、今の私たちの暮らしが便利になり、豊かになった。

枠：概念的知識としての記述　下線：「時間」「場所」「人々の取組」に関する具体的な知識

【資料 13　Ｃ児の学習問題に対するまとめの記述】

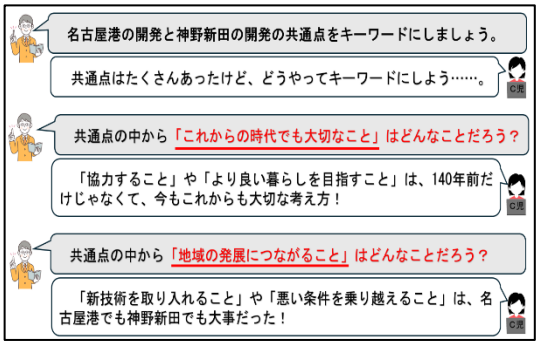
(2) 検証場面１の結果と考察

<table>
<tr><td>Ａ（十分満足できる）</td><td>Ｂ（おおむね満足できる）</td><td>Ｃ（努力を要する）</td></tr>
<tr><td>全ての視点における具体的な知識を関連付け、概念的知識を習得できている。</td><td>複数の視点における具体的な知識を関連付け、概念的知識を習得できている。</td><td>具体的な知識を関連付けることができず、概念的知識を習得することができていない。</td></tr>
<tr><td colspan="2">17人</td><td rowspan="2">４人</td></tr>
<tr><td>10人（Ａ児・Ｂ児・Ｃ児）</td><td>７人</td></tr>
</table>

Ａ児やＢ児、Ｃ児のように、学習問題に対して、「時間」や「場所」、「人々の取組」の三つの視点における具体的な知識を関連付けながら考え、概念的知識を習得することができた子どもは21人中17人であった。これは、学習問題をまとめる前に、具体的な知識を関連付ける活動を位置付けたことによって、「追Ｑシート」に整理された「時間」や「場所」、「人々の取組」に共通する内容に気付くことができ、それらを関連付けることで学習問題をまとめることにつながったためであると考える。一方で、４人の子どもは具体的な知識を個別に整理することにとどまり、具体的な知識同士を関連付けることができなかった。これは、どの具体的な知識同士を関連付けて考えればよいかを捉えられなかったことが原因だと考える。

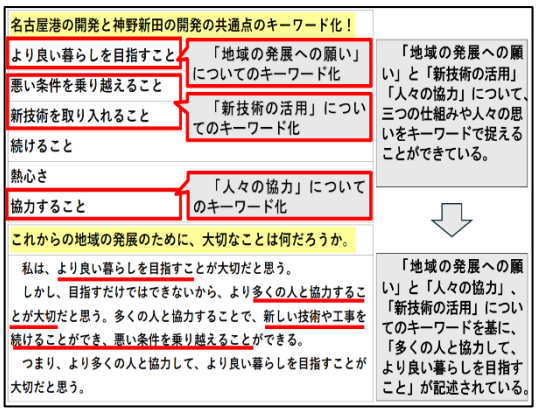
(3) 検証場面２（第13時～14時）

名古屋港の開発と神野新田の開発の「追Ｑシート」を比較し、共通点を色分けして整理した後、「使えるための問い」である「これからの地域の発展のために大切なことは何だろうか」を確認した。そこで「これからの時代でも大切なこと」「地域の発展につながること」というキーワード化の条件を明示し、共通する仕組みや人々の思いを捉えることができるように問い掛けた【資料14】。



【資料 14　キーワード化の条件(下線)を示すことで、キーワード化する様子】

Ｃ児は、キーワード化の条件を確認することで名古屋港と神野新田の開発に共通する「より良い暮らしを目指すこと」「悪い条件を乗り越えること」「新技術を取り入れること」「協力すること」等の「地域の発展への願い」「新技術の活用」「人々の協力」の三つの仕組みや人々の思いを捉えていた。次に、「使えるための問い」に対しては、「より多くの人と協力して、より良い暮らしを目指すことが大切である」と記述し、共通する仕組みや人々の思いを基に、地域の発展には人々の暮らしの向上を目指す取組が必要であることを考えることができていた【資料15】。



【資料 15　上：Ｃ児のキーワード化　下：Ｃ児の「使えるための問い」に対する記述】

(4) 検証場面２の結果と考察

<table>
<tr><td>Ａ（十分満足できる）</td><td>Ｂ（おおむね満足できる）</td><td>Ｃ（努力を要する）</td></tr>
<tr><td>共通する仕組みや人々の思いについての複数のキーワードを基に「使えるための問い」に対して知識を活用して記述できている。</td><td>共通する仕組みや人々の思いについてのキーワードを基に「使えるための問い」に対して知識を活用して記述できている。</td><td>共通する仕組みや人々の思いについてのキーワードを基に「使えるための問い」に対して知識を活用して記述できていない。</td></tr>
<tr><td colspan="2">16人</td><td rowspan="2">５人</td></tr>
<tr><td>９人（Ａ児・Ｂ児・Ｃ児）</td><td>７人</td></tr>
</table>

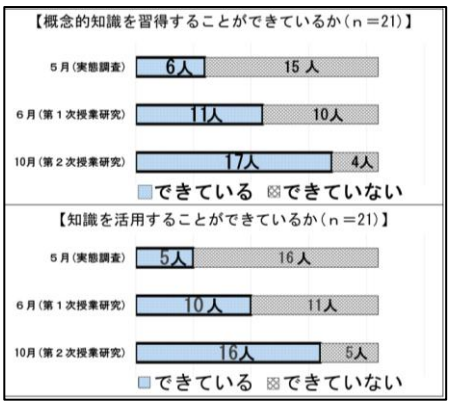
Ａ児やＢ児、Ｃ児のように、二つの社会的事象を比較したことによって、共通する仕組みや人々の思いをキーワードで捉えることができ、それを基に「使えるための問い」について知識を活用して記述できた子どもは21人中16人であった。これは、共通点からキーワード化する際に「これからの時代でも大切なこと」「地域の発展につながること」というキーワード化の条件を確認したことにより、両事象に通じる共通の仕組みや人々の思いを捉えることができ、キーワードとして整理できたからだと考える。一方で、５人の子どもは、共通する仕組みや人々の思いを捉えてキーワードにすることができなかった。これは、共通点を考える際に、「追Ｑシート」に記入された言葉の表現そのものに着目し、キーワード化の条件と照らし合わせて考えることができなかったことが原因だと考える。

Ⅷ　研究のまとめ

１　研究から明らかになったこと

(1) 習得した知識を活用する子どもの育成

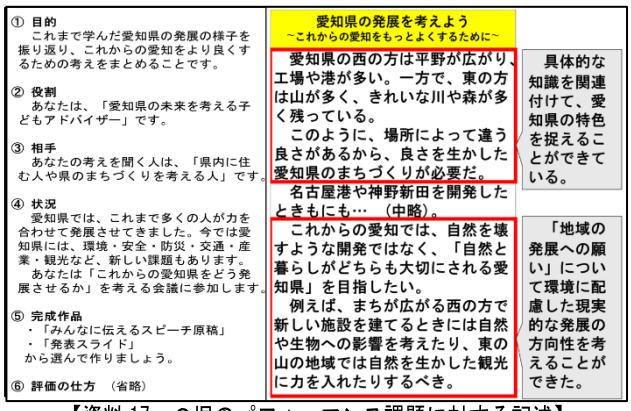
授業研究を通して、概念的知識を習得することができた子どもが６人から17人に増加した。また、習得した知識を活用して考えを記述することができた子どもは、５人から16人に増加した【資料16】。この結果から、「追Ｑシート」を活用し、三つの視点ごとに「知る」活動と「分かる」活動を往還しながら具体的な知識を関連付ける学習活動が、概念的知識を習得する上で有効であることが明らかになった。また、「使える」段階において、類似した社会的事象を比較し、共通する仕組みや人々の思いを捉えてキーワード化する学習活動が、習得した知識を活用して考える上で有効であることが明らかになった。



【資料 16　子どもの変容】

(2) 実践後の子どもの様子

第２次授業研究「発展してきた名古屋港」の実践後、パフォーマンス課題「愛知県の発展を考えよう」について考えた。実践前は現実的な課題解決策に欠け、知識の活用には至っていなかったＣ児が、「自然と暮らしがどちらも大切にされる愛知県を目指したい」と記述し、より良い暮らしに着目しながらも環境面に配慮した発展の方向性を考えることができた【資料17】。これは、Ｃ児が共通する仕組みや人々の思いをキーワードで捉えたことで、新しい文脈で知識を活用できるようになったためである。このように知識を活用して考えを記述できた子どもは、16人おり、新しい文脈でも知識を活用して考えることができた姿に、本研究の成果が表れていると考える。



① 目的
これまで学んだ愛知県の発展の様子を振り返り、これからの愛知をより良くするための考えをまとめることです。

② 役割
あなたは、「愛知県の未来を考える子どもアドバイザー」です。

③ 相手
あなたの考えを聞く人は、「県内に住む人や県のまちづくりを考える人」です。

④ 状況
愛知県では、これまで多くの人が力を合わせて発展させてきました。今では愛知県には、環境・安全・防災・交通・産業・観光など、新しい課題もあります。
あなたは「これからの愛知県をどう発展させるか」を考える会議に参加します。

⑤ 完成作品
・「みんなに伝えるスピーチ原稿」
・「発表スライド」
から選んで作りましょう。

⑥ 評価の仕方　（省略）

愛知県の発展を考えよう
～これからの愛知をもっとよくするために～

愛知県の西の方は平野が広がり、工場や港が多い。一方で、東の方は山が多く、きれいな川や森が多く残っている。
このように、場所によって違う良さがあるから、良さを生かした愛知県のまちづくりが必要だ。
名古屋港や神野新田を開発したときもにも…（中略）。
これからの愛知では、自然を壊すような開発ではなく、「自然と暮らしがどちらも大切にされる愛知県」を目指したい。
例えば、まちが広がる西の方で新しい施設を建てるときには自然や生物への影響を考えたり、東の山の地域では自然を生かした観光に力を入れたりするべき。

具体的な知識を関連付けて、愛知県の特色を捉えることができている。

「地域の発展への願い」について環境に配慮した現実的な発展の方向性を考えることができた。

【資料 17　Ｃ児のパフォーマンス課題に対する記述】

２　今後の研究に向けて

本研究で多くの子どもたちが、知識を往還しながら整理し、具体的な知識を関連付ける活動や類似事象を比較して共通する仕組みや人々の思いをキーワードで捉える活動を通して、習得した知識を活用できるようになった。一方で、具体的な知識を関連付けたり、キーワード化の条件と照らし合わせたりして考えることが難しい子どもがいた。今後は、関連付ける具体的な知識の対象を明確に示すことや、共通する仕組みや人々の思いを捉えさせるために、共通点となる言葉を分類した上でキーワード化させるなどして、習得した知識を活用できるように研究を進めていきたい。

参考・引用文献　石井英真『授業づくりの深め方』ミネルヴァ書房(2020)